

HISATO OSAWA

阪神間モダニズムの音楽

Music of Hanshinkan Modernism

大澤壽人の室内楽作品より

from Chamber Works of Hisato OSAWA

2022年1月8日(土) 15:00開演

3:00 p.m. Saturday, January 8, 2022

芦屋市民センター(ルナ・ホール)

Ashiya Citizens' Center / LUNA HALL

主催:芦屋市・芦屋市教育委員会

資料協力:神戸女学院

プログラム

「大澤壽人—音楽都市ボストンのウルトラモダニスト」 生島 美紀子

————休憩(10分)————

大澤 壽人
Hisato OSAWA

チェロとピアノのためのソナタ 変長調 (1932) [校訂版初演]

Sonata for Violoncello and Pianoforte in G Major

第1楽章 アレグロ・モデラート

第2楽章 アンダンテ 愛情深く、印象的に

第3楽章 レサタティヴ モデラート

第4楽章 スケルツォ アレグロ

〈演奏〉林 裕 (チェロ) 佐竹 裕介 (ピアノ)

————休憩(10分)————

ピアノ五重奏曲 ハ短調 (1933)

Piano Quintet in C Minor

第1楽章 ラルゲット 音の長さを保って

第2楽章 ワルツ アンダンテ 歌うように だが甚だしくなく

第3楽章 アダージョ・モルト～アレグロ 激しく

〈演奏〉マウロ・イウラート (1st ヴァイオリン) チプリアン・マリネスク (2nd ヴァイオリン)

ザザ・ゴグア (ヴィオラ) 林 裕 (チェロ) 佐竹 裕介 (ピアノ)

◇「チェロとピアノのためのソナタ」校訂者について

校訂: 山口 博明 Hiroaki Yamaguchi

京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。第68回 日本音楽コンクールピアノ部門、第2位 及び 三宅賞受賞。ピアノソロをはじめ、Duo Yamaguchi (Piano & Cello)、室内楽、コンクールでの公式伴奏、編曲等の活動も行っている。2017年、資料論文「大澤壽人《チェロとピアノのためのソナタ 変長調》の自筆譜に見られる追記についての考察 -淨書・校訂作業を通して-」が学会誌「関西楽理研究 vol.34」に掲載された。

現在、京都教育大学教育学部音楽科教授。京都市立芸術大学・相愛大学非常勤講師。

演奏者プロフィール



林 裕 チェロ Yutaka Hayashi, Cello

東京芸術大学を卒業。日本音楽コンクール第一位、黒柳賞を受賞。アフィニス文化財団、ローム音楽財団の奨学生として、フライブルク音楽大学院を首席修了。青山音楽賞、松方ホール音楽賞大賞、大阪文化祭賞グランプリ、文化庁芸術祭優秀賞等を受賞。兵庫県芸術文化センターシリーズの年間支持率 No.1 になった。CD「SOLO ist」にシュタルケルが賛辞を寄せた他、レコード芸術の特選盤になった。元大フィル首席奏者。いづみシンフォニエッタ大阪のメンバー。泉の森コンクール、全日本学生コンクール審査員。元相愛大学准教授。現在、神戸女学院大学講師、沖縄県立芸術大学教授。セルヴェ協会名誉会員。



マウロ・イウラート ヴァイオリン Mauro Iurato, Violin

トリノ出身。ヴェルディ国立音楽院を通常より早く最優秀成績で卒業、ウィーン国立音楽大学ではフリッشنシュラーガー教授に師事。同大学のプロジェクトにより来日、アンサンブル神戸 主席コンサートマスター、大阪フィル、HPAC 等のゲストコンサートマスターとして多数出演。相愛大学、県立西宮高校各講師。モーツアルテウム大学など海外のマスタークラスで教授。ハルモニア KOBE(株) 代表取締役として音楽教育に力を注ぐ。Kobe Art Award 優秀賞受賞。自然と音楽を楽しむための動画プロジェクト開始。また甚大な被害があった母国イタリアのためチャリティーコンサートを行い総額 140 万円を寄付。



チプリアン・マリネスク ヴァイオリン Ciprian Marinescu, Violin

ルーマニアに生まれ、6 歳から 12 年間ジョルジュ・エネスク音楽院にてヴァイオリンをカルメン・ルンチャヌに師事、名手シュテファン・ゲオルギウにソリストとしての薰陶を受ける。在学中にソリストデビュー、各賞受賞。その後チプリアン・ポルムベスク音楽院(現ブカレスト国立音楽大学)に学び、ブカレスト・ヴィルトゥオージ管弦楽団等の海外演奏旅行に参加。1998 年に来日、大阪交響楽団に入団。退団後は、ヴァイオリン教師、トビリシ弦楽四重奏団メンバー、および、自ら創設したハーモニアス室内管弦楽団の音楽監督、コンサートマスター、ソリストとして活躍。2010 年より指揮活動を開始、ルーマニアおよび国内で高い評価を得ている。



ザザ・ゴグア ヴィオラ Zaza Gogua, Viola

ジョージア(旧グルジア)の首都トビリシ生まれ。国立トビリシ音楽院卒業、モスクワ音楽院大学院修了。ユーリ・バシュメット氏に師事。グルジア国立室内管弦楽団ヴィオラ奏者を経てトビリシ交響楽団ヴィオラ首席奏者、その後ドイツ・インゴルシュタット室内管弦楽団ヴィオラ首席奏者を務める。1996年、大阪シンフォニカ交響楽団(現・大阪交響楽団)のヴィオラ首席奏者として来日。1998 年にはトビリシ弦楽四重奏団を結成し、毎年演奏会を開催している。アンサンブル金沢客演ヴィオラ首席奏者を経て、現在アンサンブル神戸及びハーモニアス室内管弦楽団ヴィオラ首席奏者。また河内長野フィルハーモニックの常任指揮者を務めている。



佐竹 裕介 ピアノ Yusuke Satake, Piano

京都市立芸術大学を首席卒業。同大学院修士課程を修了。フライブルク音楽大学へ交換留学。吹田音楽コンクール、宝塚ベガ音楽コンクール、神戸芸術センター記念ピアノコンクールに入賞。京都芸術祭新人賞を受賞。ソリストとして京都市交響楽団、京都フィルハーモニー室内合奏団と共に。NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」に出演。アンサンブル・ピアニストとしても活動し、大阪フィルハーモニー交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団の各定期演奏会でストラヴィンスキイ「ペトルーシュカ」のピアノ・ソロを担当。これまでに森本雅子、両澤隆宏、迫昭嘉、阿部裕之、上野真、M. ロイシナーの各氏に師事。2007 年 9 月～2010 年 3 月ロームミュージックファンデーション奨学生。

作曲家 大澤 壽人について

1906(明治39)年8月1日、神戸に生まれる。父は神戸製鋼所創業時からの技術者。母がクリスチヤンだったことから、キリスト教を通じて西洋音楽に親しんだ。1920年関西学院中学部に入学。グリークラブに入部して山田耕筰の後輩となる。1925年初来日したフランス人ピアニスト、H.ジル=マルシェクスの神戸公演を聴いて、作曲家を志す。1926年高等商業学部に進学。ピアノを神戸在留のA.ルーチンとP.ヴィラヴェルデに師事。学内外で活躍し、近畿の学生音楽界でスター的な存在だった。

関西学院を卒業した1930年に渡米。ボストン大学音楽学部で正式に作曲を学び始めると、直ちに頭角を現した。1932年ニューイングランド音楽院にも入学し、F.コンヴァースに師事して才能が一挙に開花。ボストン大学卒業作品である1933年の《ピアノ協奏曲》は、日本最初期のピアノ協奏曲である。

また、指揮者としても優れ、卒業時にはボストン交響楽団メンバーから成るボストンポップスオーケストラと共に自作《小交響曲》を披露。同響を指揮した初の日本人となった。創作は加速し、アメリカに移住したA.シェーンベルクの影響を受けて「ウルトラモダン」を目指した独創的な作風を見せる。1934年には日本初の《コントラバス協奏曲》や屈指の大作《交響曲第1番》などを次々と完成。S.クーセヴィツキに実力を認められ、新進作曲家として名を馳せた。

1934年さらなる研鑽を求めて渡仏。エコールノルマル音楽院でP.デュカのクラスに出席、N.ブーランジェの門下に入る。翌年コンセールパドゥルー管弦楽団を率いて、パリで日本人初の自作自演演奏会を開催。J.イバールやA.オネゲルなど、大作曲家たちが訪れる華やかな会場で、絶賛を博した。同時に指揮者としても実力を認められ、欧米に通じる輝かしいキャリアを築いた。

1936年に帰国。帰朝演奏会では先鋭的な作風が理解されず、日中戦争下に発表した《ピアノ協奏曲第3番 神風協奏曲》は愛国的でないと批判された。だが時代に阻まれながらも決して屈せず、神戸女学院の教壇に立ち、ラジオや映画、宝塚や松竹の音楽、ジャズ風協奏曲から校歌に至るまで、幅広いジャンルで多彩な作品を創作した。

戦後は時代の寵児として大活躍する最中、1953(昭和28)年10月28日に急逝。作曲・編曲を合わせ1000近くの作品を遺した。

没後は半世紀以上忘れられたが、2004年にNAXOSからリリースされた《神風協奏曲》のCDが文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受賞。奇跡的な大澤復活ブームが起こった。2006年大澤家が3万点に及ぶ遺品を神戸女学院に寄贈。自筆譜と資料の学術調査が進み、煌めくばかりの活動の全貌が現れた。近年はメディアに取り上げられることも多く、市販CDは10種以上。2021年秋にNHK-Eテレから《神風協奏曲》が全国放映され、同年末まで三宮の民音音楽博物館で大規模回顧展がロングラン開催された。戦前戦後にこれほどの邦人作曲家がいた、と驚きをもって再評価されている。



神戸女学院所蔵資料

◎プログラム・ノート、プロフィール執筆：生島 美紀子 Mikiko Ikushima

スタンフォード大学大学院修了、音楽学で日本人初のM.A.取得。A.オネゲルの研究で大阪大学より博士号取得、オネゲル作曲《交響曲第三番 典礼風》の日本初スコアの作品解説を執筆。2006年以来、母校神戸女学院に寄贈された大澤壽人氏の3万点に及ぶ遺品資料の担当教員を務める。自筆譜1万枚を中心に全てを学術調査した『煌きの軌跡』は、音楽クリティック・クラブ特別賞受賞。初の評伝『天才作曲家 大澤壽人』を執筆し、みすず書房より出版。現在「大澤資料プロジェクト」代表を務め、コンサートや講演会の主催、民音音楽博物館（神戸）における「大澤壽人展」監修などを通じて、同氏の音楽の普及活動にあたっている。

プログラム・ノート

大澤壽人のボストン留学時代(1930-34年)

『チェロとピアノのためのソナタ ト長調』と『ピアノ五重奏曲 ハ短調』は、26歳のときに作曲された。当時のボストン交響楽団常任指揮者S.クーセヴィツキは、定期演奏会で「現代音楽」を数多く取り上げていた。大澤はこうした最先端の音楽に影響を受けて「ウルトラモダン音楽」の創作を目指すようになり、若手前衛派として脚光を浴びた。

両作品で注目される弦楽器の「四分音(しぶんおん)」はその表れである。半音の幅より小さい微細音程の取り入れは、1930年代の最新の作曲法の一つであり、日本洋楽史において、四分音を聴かせどころとするおそらく「初」の演奏会用作品である。

❖ チェロとピアノのためのソナタ ト長調 (1932年)

1932年11月に完成、翌33年1月に発表。初演は著名演奏家、チェロのG.ブラウンとピアノのF.ティロットソンが行い、大成功を収めた。速く西洋的な第1・4楽章の間に、遅目で日本的な第2・3楽章が挟まれて、見事な独創性が示される。

・第1楽章 アレグロ・モデラート

ソナタ形式。短い前奏の後に、ト長調の第1主題がチェロ、ピアノの順で提示され、力感にあふれる。二長調の第2主題は対照的に、ピアノの三連符に乗ったやわらかな旋律で、「ト-ニ」の完全5度上の調配置が西洋の伝統的な形式に基づく。ダイナミズムを爆発させる展開部の後、急速なコーダが再現部を締めくくる。

・第2楽章 アンダンテ 愛情深く、印象的に

ト短調の3部分形式。ピアノの最弱音によって、ト音上に日本の音階で構成された4/4の主題が始まる。第2部はニ短調6/8で、「ト-ニ」の関係が前楽章と同様である。第3部ではチェロのフラジョレット奏法による倍音で、冒頭の主題が再現される。

・第3楽章 レサタティヴ モデラート

調号が省かれ、長調でも短調でもない「ト調」による叙唱。冒頭やチェロの二重旋律に四分音が用いられている。ピアノの最低音は「二音」を保持したまま解決されず、その不安定さがチェロの語りを浮き彫りにする。

・第4楽章 スケルツオ アレグロ

スケルツオがトリオを挟む3部分形式で、大ロンド形式A-B-A-C-A-B-Aの特徴を併せ持つ。ト長調のスケルツオA-B-Aは、旋律とスタッカートの対比が躍動感を生む。抒情をつかの間感じさせるトリオCはハ短調で、「ト-ハ」の完全5度下方の調配置が西洋的である。再びスケルツオの後、きわめて速いコーダによって全曲が終了する。

❖ ピアノ五重奏曲 ハ短調 (1933年)

『チェロソナタ』から4ヶ月後、1933年3月に『ピアノ五重奏曲』は完成した。作曲を正式に習い始めてわずか2年半だが、演奏時間30分近い本作はすでに室内楽ジャンルにおける代表作と言える。完成時には、ボストン響初代公式ピアニスト、J.サンロマとデュレル弦楽四重奏団によって試演が行われた才煌めく作品である。

・第1楽章 ラルゲット 音の長さを保って

大規模なソナタ形式。序奏から各弦楽器が四分音を含む旋律を奏する。ハ短調4/4のゆったりとした第1主題、続いてハ長調3/4の軽快な第2主題が呈示され、展開部はト短調を中心とする。長い再現部はピアノから始まり、なおも展開的な要素を保ちながらコーダに突入する。

・第2楽章 ワルツ アンダンテ 歌うように だが甚だしくなく

A-B-Aの3部分形式で、2つのワルツが登場する。ニ短調のワルツAは内向的で、イ長調のワルツBはロデオの音楽のように陽気である。

・第3楽章 アダージョ・モルト～ アレグロ 激しく

序奏とコーダをもつ大ロンド形式A-B-A-C-A-B-A。四分音を含む各独奏が形式を区切り、指で楽器を叩く特殊奏法が用いられ、第1楽章第1主題が再登場する循環形式など、さまざまな特徴をもつ：序奏（チェロ独奏）-A-B（第2ヴァイオリン・ヴィオラ独奏）-A-C（第1楽章主題の循環、胴体を叩く、第1ヴァイオリン独奏）-A-B-A-コーダ。

「阪神間モダニズムの音楽」について

阪神間は、山と海の間に抱かれ、大小の河川と河岸が穏やかな風致を形づくり、古来風光明媚な土地として知られてきました。明治時代になり日本の産業革命によって、近世以来の商業都市大阪や、貿易港神戸が発展します。明治後半からは、二都市間をつなぐ交通の発達と大都市のさらなる成熟とともに、自然豊かな郊外である阪神間に移り住む人が増えました。居留地のあつた神戸に近い土地柄から外国人も多く住み、日本人居住層の経済的な豊かさとあいまって、阪神間では西洋的な近代文化がいち早く華開きました。

ロシア革命前後からは亡命ロシア人音楽家たちが神戸へ来日、そして「芦屋文化村」と呼ばれる洋風住宅地を中心とした芦屋周辺に集まることとなります。ピアニストのアレクサンダー・ルーチン、ヴァイオリニストのミハイル・ヴェクスラー、指揮者のヨーゼフ・ラスカやエマヌエル・メッテルなど多くの音楽家は、演奏家であると同時に優れた指導者であり、音楽の理論や技術だけではなく、成熟した19世紀の音楽文化を直接伝え、戦前の阪神間そして関西の洋楽を発展させる推進力となりました。そして大澤壽人(1906-1953)、貴志康一(1909-1937)、朝比奈隆(1908-2001)、服部良一(1907-1993)など、重要な音楽家を多数生み出しました。

大澤壽人は、ボストンとパリで学んで当時の最先端のモダンな作曲を身につけ、ボストン交響楽団やパリのパドゥルー管弦楽団を率いて自作曲を指揮して成功するなど、両都市で高い評価を得て帰国し、多方面にわたるジャンルの作曲を手がけ 1000 近くもの作品を遺しています。貴志康一はジュネーヴでヴァイオリンを、ベルリンではヴァイオリンのほか作曲を学び、西洋の楽式で東洋の美を紹介することを目指し、日本的情感に満ちた曲を作りました。自作曲をメインにしたプログラムでベルリン・フィルを指揮、また日本の風物を紹介するドイツ語での映画も発表し、成功をおさめました。朝比奈隆は、ベートーヴェンやブルックナーの演奏で世界的に評価の高い指揮者であると同時に、戦後すぐに現在の関西歌劇団と大阪フィルハーモニー交響楽団を設立し、関西楽壇の礎を築いた先駆者でした。服部良一は、西洋の厳密な和声法や管弦楽法を身につけて和製ポップスを3000曲近くも作曲し、日本の大衆音楽に新しい道筋をつけました。朝比奈隆、服部良一の両者とも同じメッテルに師事しながら、ジャンルも音楽性も異なります。

異なる強い個性が阪神間で同時期に生まれた事実は、しなやかな民主導だからこそあり得たとも言えるでしょうし、阪神間モダニズムの深さを物語るものです。一方で新しい時代の音楽を切り拓く先進性を共通して持つことも、阪神間モダニズムのあらわれといえます。耳で聴く阪神間モダニズムともいえる音楽作品の演奏機会を重ねると同時に、理念を継承する新しい創作が期待されています。